母の日

槇本楠郎

青空文庫

一

新しいランドセルを脊負ひ、新しい草履袋をさげて、一年生の進ちやんは、元気よく学校から帰つて来ました。

「ただいまア！」

「はい、お帰りなさい。早かつたわねえ。」

さう云つてお母様が、すぐニコニコして玄関に出ていらつしやると、進ちやんは帽子をとり、靴をぬぎながら、お母様にききました。

「ママ、今日、ほんとに何も買はなかつた？　ほんとに、夕御飯のおこしらへ、なんにもしてない？　お野菜なんか、ほんとに買つてないかア？」

お母様は、進ちやんの帽子と草履袋とを取上げて、ニコニコしておつしやいました。

「ええ、ほんとに、なんにも買はなかつたわ。だつて、今朝みんなにお約束したんですもの。」

「あツ、うれしい、助かつた！　僕、お使ひに行くのがうれしくつてね、走つて帰つたの。ねえママ、ランドセルや筆入も、僕の脊中でね、一ツ二ツ・ガツチヤガチヤ、左ツ右ツ・ガツチヤガチヤつて、さわぐんだよ。きつと、うれしいんだね、ママ。」

「ホホウ、さうかしら？」

「さうだよ、ほんとにさうなんだよ、ママ。今日はうちの『ママの日』なんだもの。ねえ、ま

だ姉ちやんも兄ちやんも帰つて来ない?」

「ええ。まだお午すぎですもの。一時ごろになると、純子ちやんが帰つて来るでせうし、二時ごろに耕一さん、三時ごろに蓉子姉ちやんが帰つて来るはずだわ。」

「ぢや、僕、ひとりで先にお使ひに行つて来ようかな。ねママ、僕ねえ、いいもの買つて来てあげるのよ。あててごらん。ママの大好きなもの。あてたら、えらい。」

「さあ、なんでせうね?」

「あてたら、えらい!」

「さあ、なんですかねえ?」

そんなことを云ひながら、進ちやんとお母様は、子供部屋に入つて来ました。

「ねえ、わかんない、ママ。」

「わかんないわ。ほんとに、なんでせう?」

「僕の買つて来るものねえ——云つちやをか——ねえ、三ツ葉を五銭と、にんじんを二三本。それだけ。」

「あら、あんた、そんなもの、ひとりで買つて来られるの?」

「買つて来られるさア! 風呂敷もつて、市場に行つて、お金を出して、包んでもらふんさ。純子姉ちやんはね、おじやがと、茨ぉんどうなんだよ。耕一兄ちやんも蓉子姉ちやんも、何か買つて来るんだよ。みんな手分けで買つて来ることに、昨夜、ちやんと決めたんだよ。ママ、

知らないでしよ。ないしよなんだから。」

「あら、あら。ないしよを聞いちやつて。いいの？　ママ、困るわ。」

「いいんだよ、いいんだつて、ママ。だまつててね。だけど、僕、困つちやつたなア。」

するとお母様が、笑つて云はれました。

「いいのよ、進ちやん。ママ、なんにも聞かないことにして置くわ。ね、それでいいでしよ。」

「ぢや、指切りしてよ。」

さう云つて進ちやんは、すぐお母様の細長い小指に、自分のちつちやい可愛いい小指を巻きつけて、面白さうにゆすりながら、指切りをしました。

ほどなく、尋常三年生の純子ちやんが、やはりランドセルを脊負つて、縁の広い帽子の下から汗を流しながら、リンゴのやうに赤い頬つぺたをして帰つて来ました。

「ただいまア！　ママ、進ちやんもう帰つた？　わたし、お掃除で、おくれちやつた。すぐお使ひに行くの。さあ、風呂敷出して。」

純子ちやんは玄関に入るが早いか、もうそんなことを云つて、学校のお道具をお部屋にしまふと、すぐ進ちやんを誘つて、めいめいのお小遣をもつて、外へとび出しました。

「気をつけるんですよ。ね、進ちやん、純子ちやん。」

お母様は二人を見送ると、茶ノ間の長火鉢の横に坐つて、雑誌を膝の上に開きながら、うれしさうにこんなことを思はれました。

「……あの子供たちを育てるためには、私たちも、ずゐぶん苦労をして来たものだ。でも子供は、やつぱり大切にしてやるべきものだ。明日は五月の第二日曜で、『母の日』だと云ふので、うちではみんなあんなにして、今日の土曜を『母の日』に繰上げて、わたしをいたはつてくれる。一ばん大きい娘は、もう夕御飯のお米まで、ちやんと今朝といで学校に行つてくれたし、お菜もつくつてはいけないと云ふし、わたしは、なんにもすることがなくつて、あアあ、ほんとに勿体なくて、退屈して、欠伸が出さうだわ……」

二

午後二時ごろ、尋常六年生の耕一君が帰つて来、それから三十分ほどたつて、女学校二年生の蓉子さんが帰つて来ました。二人とも学校道具の外に、風呂敷包をさげてゐました。もう、お使ひをすまして帰つてゐるのでした。けれど中に何が入つてゐるのか、二人ともお台所へすぐ持つて行き、お母様には見せませんでした。

「見られては堪らん堪らん。」——耕一君は、ブラン〳〵と振つて見せながら、さう云ひました。

「手品の種明しはごめんね。ね、お母さん。あとで、とつても御馳走しますから。」——蓉子さんはスカートでかくしながら、さう云ひました。

そして二人とも、まだ帰つて来ない純子ちやんと進ちやんのことを心配しました。

「また、紙芝居でも見てるんかな？」

「さうぢやないわ。きつと、市場の横に出来たパン屋の売出しを見てるのよ。ゴム風船や、紙のお面をくれてたわ。それが、とても子供が大勢で大変なの。」

耕一君と蓉子さんがさう云ふと、お母様は退屈さうに欠伸をして、かう云はれました。

「ぢや、わたし、ちよつとそこまで出て見ませう。もう三時が来るから、そろ〳〵お夕飯のこしらへをして頂かないと、おそくなりますから。」

「ぢや、やらう、姉さん。」

「さ、ぢや、手伝つて。だけどねお母さん、今日はお台所を来て見てはだめよ、さあお上りなさいと云ふまでは、お行儀よく、こちらで待つててね。ぢや、耕ちやんと手伝つて。」

さう云つて蓉子さんはお台所にいつて、お母様の割烹前掛を引つかけると、耕一君にダブダブの両腕をふつて見せました。それから二人はクスクス笑ひながら、お台所の障子を閉め、てんでに自分の買つて来た風呂敷包を開きました。

耕一君の風呂敷包からは、新聞紙にくるんだ緑色の胡瓜と、赤いトマトとが、たくさん出て来ました。姉さんの紫色の包からは、ボール箱に入つた鶏卵と、温かさうなお菓子包のやうなものが出て来ました。

「ほら、これ、ホヤ〳〵よ。コロッケなの。チキン・コロッケよ。お母さんの好物でしよ。だから、わたし、買つて来たの。」

「いつたい、姉さん、どんな献立をするつもりなんだい？　効能ばかり云つてて。ちやんと、お汁まで出来るの？　大丈夫か？」

「ええ、大丈夫よ。それよりあんた、胡瓜でも人蔘でも洗つてよ。これから忙しいのよ。」

その時、進ちやんと純子ちやんとが、はしやいで玄関から帰つて来ました。二人とも風呂敷包をダランとさげて、進ちやんは顔にお面をかぶつてゐました。

すぐ二人とも、お台所へ入つて来ました。そしてお母様が、その後についていらつしやると、進ちやんは両手をひろげて飛び出し、お母様のお腹を、頭と両手とでグングン押しやりながら、かう叫びました。

「だめ〳〵、ママ。お行儀がわるい。あつちに行つてらつしやい。あつちに行つてらつしやい。本読みでもしてらつしやい。」

三

五時半には、お父様がお勤めから帰つていらつしやいました。六時から六時半までにはお夕飯なのですが、今日は七時になつても、まだお夕飯が出来ないのです。

「おい、まだかい？　あんまり御馳走しなくつてもいいから、早くごはんにしてくれないかな。お父さんは、腹ペコなんだがな。」

お父様が、からかふやうに台所に向つておつしやると、台所からは四人の子供たちが、口々

にこんなことを云ひました。

「なんだパパ、お行儀がわるいぞ。」

「パパ、待つてらつしやい。」

「もういいかツたら、もういいかア？　まアだだよツたら、まアだだよウ！」

「お父さん、おとなしく待つてる子がいいの。タバコでも吸つて、ママと遊んでらつしやい。」

そして、みんなクス〳〵笑ひました。

中ノ間のお父様もお母様も、顔を見合はしてニツと笑はれました。

「……タバコでも吸つて、ママと遊んでらつしやいだつて……ハハア、弱つたな。」

「でも、あなただつて、とてもうれしいでしよ。子供たちが、みんなで、あんなにしてくれるやうになつたんですもの。」

「ふうん、悪くはないさ。」

お父様もお母様も、三十前後では、とても苦労をなさいました。それは、お父様が長いあひだ病気されて、会社をやめさせられてからでした。お父様は青白い顔をして、家で耕一君たちを遊ばせ、お母様は赤ん坊の純子ちやんをおんぶして、お父様のお友達を訪ね廻つてお金を借りたり、仕事口をさがして貰つたりしたのです。或る時は、ごはんの代りに甘藷を食べたり、貰つた栗をゆでて、純子ちやんにはやはらかく咬んで、口うつしに食べさしたりしたこともありました。

今、お父様もお母様も、ふと、そんな時のことを思ひ出して、子供たちがみんな大きくなつてくれたことを、どんなにうれしく思はれたかわかりません。

七時半が来た時、一ばん小さい進ちやんが飛び出して来て、お母様とお父様の手を引つぱりました。

「さ、ママ、パパ、いらつしやい。ごちそうが出来たんだよ。僕もつくつたんだよ。」

そこへ、純子ちやんと耕一君とが、また迎へに来ました。

「早く来て。とつても御馳走が出来たんだから。さ、パパもママも立つの。」

「どうぞ、腹ペコのお客さん、食べて下さい。今日はお母さんの方が、先に行くんだよ。さ、おみこしを上げて。ほら行け。お尻を押すよ。ワッショイ、ワッショイ！」

「あら、困るわ。よしてよ。」

お母様は笑ひながら、でも遠慮なく先に立つて、お茶ノ間に入つて来られました。その後へ、お父様がニコ〳〵しながら、進ちやんに負ぶさつた真似をして、入つて来られました。

「まあ、大へん、大へん。よく出来たわねえ。」

「よう、えらい御馳走だな。」

お母様もお父様も、びつくりなさいました。広い食卓には、いろんな御馳走が、きれいに並べてあるのです。

丸い洋食皿には、コロッケと、きれいに切つたトマトと胡瓜が入れてあります。お舟のやう

なお皿には、じやがいもと、莢ゑんどうと、人蔘との煮付が盛られ、赤い椀には、三ツ葉と鶏卵のお汁が、いい匂ひを立ててゐるのです。

「ママは、ここ！　早く坐れエ。」

進ちやんは、正面の席へお母様を坐らせました。純子ちやんは、その左へお父様を坐らせました。そして二人は、その両脇に坐りました。蓉子さんは、いつものお母様の場所に、ごはんのお櫃を置いて坐り、その側へ耕一君が並びました。

「えらい御馳走だな。早速いただかうかな。それとも、何か挨拶があるんかね？」

お父様がさうおつしやると、耕一君が立上つて、「エヘン」と一つ咳払ひをして、ニコ〳〵笑ひながら、次のやうに云ひました。

「今日は、五月の第二土曜日で、ほんたうは明日の第二日曜が『母の日』です。母の日といふのは、僕たち子供が、赤ん坊の時から面倒を見て育てていただいたお母様に、いや世界中のお母様方に、心からお礼を云つてお祝ひをしてあげる、一年に一日しかない目出度い日です。これは、アメリカから始められて、今では世界中にひろまつてゐるのださうですが、日本では、まだあまり行はれてゐません。僕たちは、蓉子姉さんが女学校から聞いて来たので、早速、昨夜みんなで相談して、今日の夕御飯だけでも僕たち子供でつくつて、僕たちのお母さんに食べさして上げたいと思つたのです。明日はお父さんが一日いらつしやらないと聞いたので、一日だけ繰上げたのです。お料理の材料は、僕たちが頂いて溜めてたお小遣で買つて来たのです。

どんなにおいしいか、さあ食べて見て下さい。――をはりツ！」

さう云つて坐ると、みんな笑つてパチパチと手を叩きました。お母様は目をうるませて、泣くやうな笑ふやうな顔をして、みんなに幾度も幾度も、おじぎをなさいました。

「ぢや、もう食べてもいいね。おあづけは、もうすんだんだらう？」

お父様がニコニコしておつしやると、お母様も初めてニコニコ笑つておつしやいました。

「皆さん、どうも有難う。ママは、とてもうれしくつて、胸がつまつちやつてね、なんにも云へなくなつちやつたのよ。ごめんね。ほんとに有難う。では、いただきますよ。」

すると、もう箸をとつて、ムシャ〳〵食べてゐたお父様が、みんなの方を見て、

「いただきまアす！」と、おつしやつたので、みんな噴き出してしまひました。

「パパ、ママ、莢ゑんどうね、僕がへたをとつたんだぞ、おいしい？　おいしくない？　ハツキリ云つて。」

「おいしいわ。とつてもおいしいわよ。」

「パパは？」

「うん、おいしい〳〵。だけど、『ママの日』はあつても、『パパの日』はないんかねえ？　ねえ蓉子。なんとかして、『パパの日』もつくつてくれんかな？」

すると、蓉子さんが答へました。

「さうねえ、なんだか、ないのはへんね。気の毒みたいだわ。みんな、どうする？」

そこで、みんな、はしやいで御飯を食べながら相談しました。そして結局、お父様が夜学の工手学校を出て、初めてお勤めをされた四月五日を「パパの日」、つまり「父の日」と決めることにして、やがてこの日の楽しい夕御飯を終りました。

―昭和一二年四月二四日作―

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　三〇巻」ほるぷ出版
　1978（昭和53）年11月30日初刷発行
底本の親本：「猫と誕生日」冨山房百科文庫、冨山房
　1939（昭和14）年12月
初出：「お話の木」子供研究社
　1937（昭和12）年7月
※底本は新字旧仮名づかいです。なお促音の小書きの混在は、底本通りです。
入力：菅野朋子
校正：雪森
2014年6月22日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

母の日

槇本楠郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/